

【翻刻・解題】 山陰歴史館蔵『無題歌合集』(二)

渡邊 健 米子高専古文書の会

概要

ここでは、前稿に引き続き山陰歴史館蔵『無題歌合集』の翻刻本文を掲載する。資料番号 10 「網代・顕恋」から 16 「九月末つかた 喜蔭撰」までを掲載し、稿末に【翻刻付記】として底本の誤脱等についての私見を記した。

10 網代・顕恋

網代

- | | | |
|----|---|---|
| 左勝 | 1 御贄 <small>(みにへ)</small> にと赤き心の色に出でてよたゞ網代に篝 <small>(か)</small> たくらん 常之 | 7 河風に瀬 <small>(せ)</small> ゝのかゞり火消え果てて寒き夜すがら網代守る也 長行 |
| 右 | 2 田上 <small>(たのう)</small> の霜の川風身にしめて幾夜かおなじ網代守るらん 薫 | 8 篝火のなびくはや瀬のあじろ木に嵐のさゆる淀 <small>(よ)</small> も見 <small>(ま)</small> へけり 兼利 |
| 左持 | 3 月影も氷るばかりの川風を真袖にしめて網代守るらむ 鎮喜 | 9 あらし吹く宇治の川づら人もなしたゞ網代木の波にゆられて 日孝 |
| 右 | 4 おのが世のあはれかたぶく月影としらで網代の床に見るらん 重好 | 10 冬の夜の月さへ <small>(ま)</small> 渡る網代木に河風寒く守り明かすらん 豊正 |
| 左勝 | 5 あじろぎにいさよふ月も明けぬらし氷を出づる水のしら波 重固 | 11 朝日山明くる光りに宇治川の網代の床に霜けぶる也 常之 |
| 右 | 6 あらし吹く宇治の河瀬の寒き夜を袖に絶えても網代守るらし 房則 | 12 あじろ守る篝の火影小夜更けて浪のほ寒しひをやよるらん 宗武 |
| | | 13 春秋のほそき命をあじろ木にうちまかせてや世をすごさまし 鎮喜 |
| 左 | | 14 河波に月の光りのかつちるは網代によする氷魚のかげかも かをる |

- 15 頭恋 左
今さらにあはれ難波の玉がしは藻に埋もれぬ袖の涙を 兼利
右勝
- 16 宇治川の瀬ゝのあじろ木霧晴れて頭れ渡る我が思ひかな 秀年
左勝
- 17 人しれずむすびあひにし糸すゝきあれやはかなく穂にやいでつる 常之
右
- 18 山影のひとむらすゝき人しらぬ露のなげげの穂には出でにき 薫
左持
- 19 人しれぬおもひの氷とけしより小河の瀬ゝに波さわぐ也 重好
右
- 20 たはれゆく蝶の羽袖につゝむとも垣のすみれは色に出でにけり 鎮喜
左勝
- 21 いつよりか乱れし露の袖の上に頭れ初めし薄月夜かな 重固
右
- 22 うきつらきしのぶ心も今ははや袖の涙の色に出でにけり 房則
左勝
- 23 我が恋はあはれあしびのすくも火のかひなき空に烟立つ也 兼利
右
- 24 山かげの筒井のいづゝ頭れて汲みかはしたる人ぞ恋しき 長行
左勝
- 25 夢にだにつゝましかりし我が恋をつげの枕よ誰につげけん 秀年
右
- 26 わたつみの底のみるめはからなくも波のよる瀬にいかで見えけん 薫
- 27 さ霧たつは山が裾のうすもみち風のまよひに色ぞあらはる 常之
左持
- 28 つゝましき袂の露の今更にこぼれて人にしられこそすれ 日孝
左
- 29 松見草梢あらはにむらさきのゆかりの色今朝は見ゆらむ 豊正
右勝
- 30 夢の間のちぎりなりしを我が恋の世に頭れて誰かたりけん 宗武
左
- 31 若菜つむ野辺に処女(をとめ)のなかりせばなど言のはの頭れましを 国常
右勝
- 32 夕凝(ゆがこり)の雲は薄れてかひなくも梢の月と頭れにけり 秀年
口上をしるす
こたびの歌合は心のとまる趣向いと多し。依りて作者のみこゝろもかへりみず、無礼の事をもいひ、余りに直し過ぎたるも多く侍り。抑(おさへ)歌合は、勝敗を論ずる物なれば、直して勝を譲りては、負けたる方ぐ腹ふくらし給ふべけれど、玉を捨て瓦を拾ひ出づべきならねば成るべし。かくて今より後は、直したりとも玉のひゞきあるを秀逸と定むべし。こは稽古卷なれば、例にたがへりとして異論あるべからず。
古蔭
- 抜

33 春秋のほそき命を網代木にうちまかせてや世を渡るらん 鎮喜

34 宇治川の瀬ゝのあじろ木霧晴れて頭れわたる我がおもひ哉 秀年

35 おのが世のかたぶく影としらずして網代の床に月を見るらん

36 御贄にと赤き心の色に出でて網代のかぐり焚かぬ夜ぞなき 常之

37 結ばれしおもひのこほり解けしよりうき世あまたに浪さわぐ也 重好

38 花の香は小蝶の袖につゝめども董は色に頭れにけり 鎮喜

39 網代木にいさよふ月も明けぬらし氷をもるゝ水の白なみ 重固

40 雲隠れつゝましくのみおもひしを高ねの月と頭れにけり 秀年

41 夢にだにつゝましかりし我が恋をつげの枕よ誰に告げけむ 同

42 いつしかとみだれし袖の露の上に頭れ初むる夕月のかげ 重固

43 川浪に月の光のかつちるは網代に余る氷魚のかげ鴨 薫

44 朝日山明くるひかりに宇治川をあじろの床は霜けぶる也 常之

45 逸 かぐり火のながめになれて網代木にさゆる嵐の淀の見えけり 兼利

46 川風はいたくな吹きそ世を宇治の網代守るらむ翁の袂に

47 人しれぬ枕の山のさねかつらさねしは夢とおもひし物を 古蔭

追加二首

11 埋火・寄山恋

埋火 寄山恋

左勝

1 雪吹せしをすの外寒き埋火のあたりの夢も覚めがてにする 重固

2 夜もすがら雪吹きさそふ風の音もふすまにうづむ埋火の本 貞明

左持

3 秋山の色もへ出づる埋火にさしにし炭や柳なるらむ 重好

右

4 もみぢの色に染めにし埋火に雪の花ちる窓の明けぼの 薫

左

5 埋火にむかふる内も閨の戸のすきもる風は袖寒くして 兼利

右勝

6 埋火の霜のかたへに春秋の花の姿も頭れにけり 鎮喜

左勝

7 いつしかと霜に成りぬる埋火に炭さすほどはしばし寒けし 長行

右

8 寢覚して又かきおこす埋火は更け行く夜半の友にぞ有りける 信久

左持

9 枝炭のつゝじ花咲くこゝちしてそらだき薫る埋火の本 常之

右

10 埋火のあたりは春とから猫もかすむ野の辺の夢結ぶらん 秀年

左

11 来む春をまつあらましに埋火のあたりのどけき心地こそすれ 房則

右勝

12 夢の間に閨の埋火消え果てて窓もる月の影ぞ身にしむ 宗武

左

13 夏むしの影と更け行く埋火にむかしがたりのあかぬ夜半哉 鎮喜

右

- 26 物おもふ高ねの雲の行末は花や紅葉の色にそむらん 重固
- 25 吉野山高ねの雪の深ければ入りにし人をおもひのみして 鎮喜
右
- 24 明け渡る逢坂山に横雲の別るゝ空を見るもはかなし 房則
左勝
- 23 おもひ入る恋の山路の道芝に猶踏みまよふ我がこゝろかな 豊正
右勝
- 22 浅間山あさき心のいたづらに思ひの烟りたゝぬ日ぞなき 重好
左 右
- 21 よひ／＼の枕の塵もつもりてはおもひしのぶの山とこそなれ 秀年
左持
- 20 月花にちりし心をつくぐゝとかきあつめたる埋火の本 薫
寄山恋 右
- 19 夢の間の嵐更け行く手枕にうつゝ長閑き閨の埋火 鎮喜
左持
- 18 おもふどちかきおこしつゝ埋火の残りなき迄かたる夜半哉 貞明
左持
- 17 月花の友ならねども雪の夜は寢覚したしき桐火桶哉 秀年
右
- 16 さゆる夜の嵐を余所におもふどち長閑にかたる埋火の本 常之
左勝
- 15 更くる夜に雪だれしげき松竹を埋むもしらぬ埋火の本 兼利
右
- 14 夜を寒み寢覚めて見れば赤星の影ばかりなる窓の埋火 信久
左持 右勝
- 27 今朝の朝け遠山眉ね見るからに心のゆかぬ夕暮もなし 常之
左持 右
- 28 あらし山花のゑまひの朝じめり世にわすられぬ影にも有る哉 薫
左持
- 29 夕暮の霞の中にうづもれて思ひ重なる遠方の山 長行
右
- 30 こぬ人を松の嵐の音更けて高ねは月は出でにし物を 宗武
左持
- 31 しるらめやかさなる雲のはれやらぬは山茂山しげき思ひを 兼利
右
- 32 つるばみの音づれもなく也にけり更け行く秋の山路ならずも 秀年
左
- 33 飛び越ゆる雁の翅に我が恋の晴る間もなき峰のしら雲 鎮喜
右勝
- 34 をろちすむ杉立つ山もいざ越えん忍びはつべき恋路ならねば 常之
左持
- 35 おもひあまり浅間の山のあさからぬ心しればやなびく烟も 兼利
右
- 36 まかみ鳴く荒山中の夜半の月すめばすむべき恋もする哉 薫
抜
- 37 夢の間に閨の埋火消えはてゝ窓もる月のかげぞ身にしむ 宗武
- 38 浅間山あさき心のいたづらに思ひの烟たゝぬ日ぞなき 重好
- 39 よひ／＼の枕の塵もつもりてはおもひしのぶの山とこそなれ 秀年

12 題 立春・社頭松

- 40 もみぢばの色にもえにし埋火に雪の花散るまどの明けぼの 薫
 - 41 月花の友ならねども雪の夜の寝覚したしき桐火桶哉 秀年
 - 42 枝炭のつゝじ花咲く心ちして空だきかをる埋火の本 常之
 - 43 埋火のかたへの霜に春秋の花のすがたも匂ふよはかな 鎮喜
 - 44 雪吹たつあらしの窓も埋火のあたりの夢はさめがてにして 重固
 - 45 しらみゆく逢坂山に横雲のわかるゝ空を見るもはかなし 房則
 - 46 ましら啼くあら山中の夜はの月すめばすまるゝ恋もするかな 薫
 - 47 夕暮の霞の中に埋もれて思ひ重なる遠方のやま 長行
 - 48 打ちわたす遠山眉を見るからに心のゆかぬ夕暮もなし 常之
 - 49 埋火のあたりは春と唐猫の霞む野のべの夢結ぶらん 秀年
 - 50 いつしかと霜になりぬる埋火に炭さすほどはしばし寒けし 長行
 - 51 さしそふる炭や柳の枝ならん秋の木のはの色ぞこぼるゝ 重好
 - 52 つるばみのおとづれもなく也にけり世を秋山に袖しぼれとや 秀年
 - 53 こぬ人を松のは山の末見えて高ねの月は出でにし物を 重固
 - 54 夜を寒み寝覚めて見れば赤星の影 斗ほかりなる閨の埋火 名しれず
 - 55 逸 するらめや重なる雲の晴れやらぬは山茂山しげきおもひを 兼利
 - 56 吾妹子をいさこの山の白雲はあしたゆふべにゆきかふ物を 古蔭
- 追加
- 出詠二三会有之候得共、及月通何角名残居候に付き、こゝにし
るし不申候。
嘉永六とせのうし

- 題 立春 社頭松
 - 1 朝日子の光りこゝさす山眉の雲も霞みて春は来にけり 兼利
 - 2 朝日子のほひそめたるかげともの松の葉越しに春は来にけり 常之
 - 3 四方のうみ波も音なく立ち帰る春こそはるの心なり覺 薫
 - 4 呉竹の一夜へだてし春ながらかすまぬ方も長閑かりけり 秀年
 - 5 朝日さす方よりかけて我がやどの松こそ霞め春や立つらん 美堅
 - 6 あら玉の春立つけふの朝霞棚引く山に匂ひ立つらむ 豊正
 - 7 御世なれやけさ豊年の始めとて雲井をかよふ風も静けし 宗武
 - 8 吹きなびく雪の梢は明けそめて四方の山かは春や立つらん 長行
 - 9 花鳥の色音にうとき老の身も心うかるゝ春は来にけり 秀興
 - 10 うぐひすのねぐらを出づる声の上に日影もゆらぐ此の朝け哉 重固
 - 11 春来るとしるき沢辺に鳴く田鶴の声も御空にうち霞みつゝ 兼利
- 右 左持

- 12 をとめ子が羽子つく袖のあゆの風なびくを見れば春は来にけり
薫
- 13 しかすがに霞むとなしに霞めるは春たつ空の心也けり 秀年
左勝 右
- 14 かぎり火の末あからひて春ぞたつ大城の御との明けがたの空
常之
左
- 15 塵もなく明くる野山の雪の上に霞匂ひて春は来にけり 国常
右勝
- 16 大海の波路ゆたかにかすむ也龍の宮居も春や立つらん 秀興
左
- 17 行きかよふ雲のすけきに久かたの空もとよなる春や来ぬらん
長行
- 18 明けぼのよみどりにつづく薄霞棚引く空は春立ちにけり 重固
右勝 左
- 19 埋火にうもれもはず花鳥のおもひおこせる春は来にけり 兼利
右勝
- 20 大空のみどりうつらふ氷面鏡田毎にとけて春や立つらん 豊正
左持
- 21 聞きなれし朝の雀の声さへも今朝あらたまる春は来にけり 鎮喜
右
- 22 ほのくと明くる御空の深みどり今も神代の春や立つらん 薫
左勝 社頭松
- 23 神垣のいがきの春の青みどりかわるとなしに年ふりに覺 重固
右
- 24 神代よりねざしそめつる種なれやあなすがくしもりの松原 秀年
左勝
- 25 神山のいがきの内外今朝見れば松のみどりに嵐吹くなり 美堅
右
- 26 千早振る松の梢に月よみの神の御影に千代を經ぬらん 豊正
左持
- 27 神さびし森のしめ縄春見れば老木の松ぞ宮柱なる 秀興
右
- 28 浦風に神の御心ゆらぐらしさ枝ひれふる岸の姫まつ 常之
左持
- 29 男山千代万代といは坂の松も榮行く神のめぐみに 兼利
右
- 30 しめ結ひしいがきの内の老木松さすが嵐も神さびにけり 鎮喜
左
- 31 瑞籬にしめ引きすへて千早振る松にとはばや神の昔を 薫
右勝
- 32 ゆふだすきかけて植ゑけん住の江の宮居の松は神さびにけり 秀興
左持
- 33 八重垣のかたへにたてるひとつ松恵む二葉を神や植ゑ 劍 宗武
右
- 34 立ち並ぶ松のみどりにかたそぎの影さへ見えず成りにけるかな

左勝

35 いなり山朱の玉垣あからひてみどりまゝゆき松のむら立ち 常之

右

36 宮柱したつ岩根に老茂る松は神代の種にや有らん 秀年

左

37 朝みいそぎ神の御前もふし居れば松に昔の風そよぐ也 国常

右勝

38 神垣やひとよの松に万代の末守るべき色も見えけり 薫

抜

39 大空のみどり移らふ水面鏡とくる田毎に春や立つらん 豊正

40 神垣や一夜の松に万代の末守るべき色も見えけり 薫

41 男山千世万代といは垣の松や神代の姿なるらん 兼利

42 しめゆひしいがきのうちの一つ松嵐のおとも神さびにけり 鎮喜

43 浦風に神の心もゆらぐらし枝にちなびく岸の姫松 常之

44 神さびし森の注連繩千世懸けて老木の松ぞ宮ばしら成る 秀興

45 神山の斎垣の内外霧はれて松の緑にあらし吹くなり 美堅

46 朝日かげ雪より匂ふ影友の松のはごしに春はきけり 常之

47 鶯の啼を出づる声の上に日影もゆらぐ此の朝け哉 重固

48 逸 たちならぶ松のみどりにかたそぎのひまさへ見えず成りにける

哉

年内立春の又のとしの元日に

古蔭

豊正

49 年の内の春は春ともしらざりきあなすがくし今朝のこゝろの

豊正

13 雪中若菜・船上山

左持 雪中若菜

1 いざけふは雪かきわけて鶯の羽色の若菜摘みそめにけり 鎮よし

右

2 尋ねてもつみてんものを処女子が其の名もわかず雪は降りつゝ

重よし

左

3 火たき啼く山田のすぐ菜もえ初めて雪間みどりに返す春哉 常之

右勝

4 初春のみどりかずそふな草にかゝれば雪も色なかりけり 薫

左勝

5 処女子がけふぞ若菜をもとむ也野辺の雪間のかなたこなたに 兼利

右

6 かたまもちみかたまをもち処女子が雪間の若菜けふも摘む也 重固

左勝

7 山かげのやゝもえ初むる雪間より色萌え出でし若菜摘みてん 長行

右

8 注連繩の窓うつころも降りつもる雪の晴れ間の若菜つまゝし 美堅

左

9 去年よりも積もれる野辺の雪ながら心あてにぞ若な摘むらん 豊正

右勝

10 をとめ子が袖打ちか ■ す黒髪に雪もこぼれて若菜摘む也 宗武

- 11 雪の中に道ある世とてあし引の山里人の若菜摘むなり 兼利
 左持
 右
- 12 神山のみ雪うつらふ沢みづのひまをもとめて若な摘みてん 鎮喜
 左持
- 13 淡雪のふる野の梢かきわけて若なに春の色を見るまで 薫
 右
- 14 うぐひすの鳴くなる方にいでや子等み雪かきわけ若なつまし 常之
 左
- 15 千万の春にちぎりて降る雪をいとはぬのべに若菜摘むなり 兼利
 右勝
- 16 我が門の雪間の若菜萌えそめてまだ深からぬ春の色哉 美堅
 左勝
- 17 小山田に若菜つまむとけふ来れば高ねおろしに淡雪ぞ降る 鎮喜
 右
- 18 こゝろあてにけふは尋ねて雪ながら野々べの若菜誰か摘むらん 長行
 左勝
- 19 野も山も雪にうもれし春の色を摘み頭はすは若な也けり 重好
 右
- 20 朝まだき袖ふりはへて雪間なる二葉の若な摘むは誰が子ぞ 薫
 左 船上山
- 21 月影はやゝかたぶきて船上の山風寒し小夜や更けぬる 長行
(ふなのこ)
- 22 船上の雲打ちはらひ来て見れば高ねは松の嵐のみして 宗武
 右勝
 左勝
- 23 籬雲のむかしをとへば船上の嵐身にしむ山鳩の声 常之
 右
(はたくも)
- 24 漕ぎ出でておもひかへせば船上の山は浪路の命なりけり 重好
 左
- 25 沖津浪よせては返す船上やねち木が原の後のしら雲 薫
 右勝
- 26 白雲のかゝれる見れば船上の雪の高ねや花ぐもりせん 重固
 左勝
- 27 船上や高ねの嵐降る雨に沖つ白浪立ち帰りつゝ 鎮喜
 右
- 28 船上の追風かなひぬ和田海の沖よりかけてなびく籬雲 重好
(おひで)
(わたつみ)
 左
- 29 すみ暮らす雲間の月に船上のむかしをしのお山おろしかな 薫
 右勝
- 30 春さればおきつ白浪音絶えて雲井に霞む船上の山 長行
 左勝
- 31 御垣せしかたやいづこと船上の嵐にとはむ有りしむかしを 鎮喜
 右
- 32 天皇を迎へし君があとへばかやの焼原ゆふ風ぞふく 常之
 右両題之抜
- 33 野も山も雪にうもれし春の色を摘み頭はすは若菜也けり 重好
 右
- 34 小山田の若菜つまんとおりたてば松のあらしに沫雪ぞ降る 鎮喜

- 35 我がかどの雪間の若菜萌えそめてまだ深からぬ春の色哉 美堅
- 36 船上の豊旗雲(じよはたぐも)に朝日さし高ねは松のあらし吹くなり 宗武
- 37 行幸(いせし)の後やいづこと舟の上の昔をとへば山風ぞふく 鎮よし
- 38 沢水にけふもうつれる神山の雪掻き分けて若菜摘むなり 同
- 39 はつ春のみどりかずそふな草にかゝれる雪も色なかりけり 薫
- 40 たづねてもつみてん物を処女子が其のなもわかず雪は降りつゝ 重好
- 41 いざけふは雪掻き分けて鶯の羽色にもゆる若菜摘みてん 鎮喜
- 42 逸 春されば沖つ白浪おと絶えて雲井に霞む船上の山 長行
- 14 山家鶯・春恋
- 左勝 山家鶯
- 1 山深く家居しおれば鶯(ママ)に今としの春もいざなわれつゝ 鎮よし
- 右
- 2 いたづらにけふも明けぬる谷の戸に人かとい(ママ)て鶯(ママ)のなく 重好
- 左持
- 3 雪(ママ)きへぬ片山影の鶯の声(ママ)に春(ママ)しる庵(ママ)も有りけり 兼利
- 右
- 4 滝枕春まだ寒し曙の夢おどろかし鶯(ママ)のなく 薫
- 左勝
- 5 鶯の声の末吹く松風に柴の庵も春めきにけり 宗たけ
- 右
- 6 いつしかと我が住む山も春めきぬ長閑に聞かむ鶯(ママ)のこゑ 長ゆき
- 左
- 7 手枕の寢覚長閑に山窓の日かげもゆらく鶯のこゑ 常之
- 右勝
- 8 松の戸も青む春日に雪吹せし風さえかへり鶯(ママ)のなく 重固
- 左勝
- 9 山窓の霞をわけて鶯の声もしづけき朝ぼらけ哉 宗武
- 右
- 10 わけのぼる日枝の山路の木隠れの嵐の隙を鶯(ママ)のなく 豊正
- 左勝
- 11 塵もなき竹のあみどに鶯のおのがじ(ママ)なる声を聞くかな 薫
- 右
- 12 霞みつゝ山下窓は暮れにけり花におもる鶯(ママ)の声 重かた
- 左
- 13 花なくはとふ人あらし山里はたゞ鶯(ママ)にいざなはれつゝ 長行
- 右勝
- 14 み雪散る垣つの谷の北おもて春さへたどる鶯(ママ)の声 重好
- 左勝
- 15 古(ママ)としの雪まだ深き山里にこのごろしげき鶯(ママ)のこゑ 鎮喜
- 右
- 16 山住みのひとり詠むる梅が枝に人ことぞなく鳥は空音敷 常之
- 左
- 17 夜越し来る風をはやまに鶯(ママ)の声吹きおつる谷の下庵 重好

- 18 松かげはまだ夜ごもりの高ねより軒端をとめて鶯の声 宗たけ
右勝
左持
- 19 軒寒き松の嵐やぬるみけん古巢を出でてうぐひすの啼く 鎮よ
し
右
- 20 まよひつゝ真柴のとほそとめ来ればうしろの山に鶯のなく 薫
左
- 21 世に遠き我が山住みの軒端にもなれてしたしき鶯の声 繁き
右勝
- 22 松の戸は春ともしらぬ暁の夢おどろかし鶯のなく 重好
左
- 23 山影のふせ家のつまの梅が香をわがものがをに鶯のなく 常之
右勝
- 24 百鳥もさへづる軒の山松にひとり春なる鶯のこゑ 薫
左勝
- 25 梅が枝に雪は降れども山里の春をうづめぬ鶯の声 常之
右
- 26 鶯のしばなく声のなかりせぬ春おはるとも思はざりしを 鎮よし
左
- 27 斧の音は霞む谷間の山彦を軒ばにかえず鶯のこゑ 重好
右勝
- 28 有明の月も埋れし山窓の霞の底に鶯のなく かをる
左
- 29 峰の庵戸させる雲の明けがたに月をとめて鶯の啼く 同
右勝
- 30 山窓に寢覚をいそぐ鶯の声より軒の雪とけにけり 鎮よし
左勝 春恋
- 31 空にのみうきたつ花の心にもおもひみだるゝ我が袂かな 重固
右
- 32 こがれてもかひこそなけれみよしのゝ花の梢に霞こめつゝ 豊正
左
- 33 手枕の夢路みじかき春の夜の心もしらぬ暁のかね 鎮喜
右勝
- 34 おもひわび遠の高ねを見わたせば雲さへ花の俤にして 兼利
左持
- 35 手枕にあしたの花のおもわれてうつつにかよ我が心かな 長行
右
- 36 行く水にさそはれもせで梅の花移れるかげを幾日かは見む 名しれず
左持
- 37 かげうつす堀江のきしの玉柳なびくはぎもをわすれかねつゝ 常之
右
- 38 春さればもゆる思ひに夢の夜のながゝらぬ夜もいねがてにして 重好
左持
- 39 霞たつ遠山松のはごもりの花もつれなく見ゆるにける哉 兼利
左持

- 40 氷さへとけて流るゝ春風に何かとむらん梅の下水 薫
右
- 41 青柳のなびく姿も見るからによひくおもる袖のしら露 常之
右
- 42 浅茅原妹が姿も見え初めて袖に霞のなびき行くらむ 長行
左
- 43 見まほしき君が御かげは花ざくら色さへ香さえなつかしき哉 兼利
- 44 ともすればころろかかれて春の夜のおぼろに霞む我が思ひ哉 名しらず
右勝
- 45 春風に結べばとけて青柳のいともくるしき恋もするかな 常之
左
- 46 青柳のみどりのまゆの朝雫ぬれにし袖に色もとどめず 薫
左
- 47 かすまずもまた見えましを三日月の佛おしき恋もする哉 鎮よし
右勝
- 48 雪きえぬ垣の外面のすみれ草下萌えてのみ杉やはつべき 常之
左
- 49 人しれぬおもひも今はほころびて霞にたへぬ恋もする哉 美堅
右勝
- 50 我がおもひうわの空にもみちぬらん四方の霞に立ちまよひつゝ 繁き
- 51 ゆふ霞結ばれ初めし青柳の露のみれにおもる我が恋 名しらず
左勝
- 52 あし引の山のかひなる白雲を花と見しより夜さへねられず 名しらず
右
- 53 鶯の声の末吹く松風にしばの庵も春めきにけり 宗武
抜
- 54 山窓に寢覚をいそぐ鶯の声より軒の雪とけにけり 鎮喜
- 55 うち霞む柴のあみ戸をとめくればうしろの山に鶯の啼く 薫
- 56 塵もなき竹のあみ戸に鶯のけさより霞む声を聞く哉 同
- 57 松かげはまだ夜ごもりの谷間より軒ばにうつる鶯のこゑ 宗武
- 58 影うつす堀江のきしの玉柳なびく姿をいつかわすれむ 常之
- 59 空にのみ心うかれて春の夜のおぼろにかすむ我が思ひかな 繁材
- 60 雪きえぬ垣の外面のすみれ草下萌えてのみ枯れやはつべき 常之
- 61 松の戸は春もしれぬ暁の夢驚かし鶯の啼く 重好
- 62 白雲もかすまぬ山の松かげにひとり春なる鶯のこゑ 薫
- 63 春さればもゆるおもひに夢の夜の長からぬ夜もいねがてにして 重好
- 64 青柳の靡くすがたに見てしよりよひくおもる袖のしら露 常之
重好
- 65 おもひわび遠山眉に詠むれば雲立つ花のおもかげにして 兼利
- 66 梅が多に雪はふれども山里の春をうづめぬ鶯のこゑ 常之
- 67 み雪ちる垣内の谷の小ざゝ原春さへたどる鶯の声 重好
- 68 我がおもひうわの空にもみちぬらん霞の袖に春雨ぞ降る 繁材
- 69 谷影の松のあらしもぬるむらん雪間を出でて鶯の啼く 鎮よし
- 70 ゆふ霞結ばれそめし青柳の露のみだれに物をこそおもへ 同

71 山風のさゆとはすれど松の戸の青む春日に鶯のなく 重固

15 田家梅・鐘

左 田家梅

左

1 きのかかもをしねかりほすかの見ゆる小山田白し梅や咲くらん 常之

右勝

2 小山田の朧月夜にきて見ればふせ家の軒に梅かをる也 重好

左勝

3 まさかりの梅のほひも霞む哉曙白し小山田のさと 正俊

右

4 朝日さす田づらの庵に立ちならぶ梅の花こそ長閑也けれ 豊正

左持

5 さえかへる外面の風もにくからず梅咲きにほふ小山田の庵 兼利

右

6 鶯も古巢を出でて小山田の垣ほの梅の花に嘯く也 国常

左

7 うかれ出でて山田の庵を打ち見れば朧月夜に梅かをる也 宗武

右勝

8 朝風になびく烟の末はれて梅が香寒し小山田の里 長行

左勝

9 梅が香は霞むともなく朧夜に山田まばらの里も見へけり 重固

10 あぜつたふ道も朧の春の夜にゆきまがはぬ梅のかをりや 薫

右

11 梅が香におどろかさされて賤の男が田面の草や思ひ立つらん

繁材

左勝

12 春ながら水面に然も咲く梅のほへる影をひたしてし哉 知方

右

13 小山田の庵の梅が枝咲きしより笥の水打ちとけにけり 宗武

左

14 朝ゆふの霞の上にあられて棚田の庵は梅盛りなり 正俊

右勝

15 つみ残すす菜茎たつ春風に梅が香なびく小山田の里 常之

左持

16 山田守る庵のみぎりの真柴垣ほに出でてにほふ梅も有りけり 長行

右

17 垣内田のひつぢの枯葉吹く風に匂ひ溢れて梅咲きにけり 鎮喜

左勝

18 風ゆるき田中の里の遠近ににほへる梅も香をや慰む 薫

右

19 住みすてし山田の庵に咲く梅もをりしりがをにほふ頃かな

兼利

右勝

- 20 垣内田の雪解の名も此の頃は梅が香深き春の色かな 繁材
左勝
- 21 稻茎の氷と見しは我が門にほころぶ梅の影にや有りけん 鎮喜
右
- 22 朧夜の月もほのかに明け渡る田づらの庵に匂ふ梅が香 豊正
左持
- 23 あぜつたひ霞をわけて立ちよれば伏家の軒は梅盛り也 繁材
右
- 24 あぜつづく遠山本の梅の花さながら残る雪の明けぼの 薫
左
- 25 まさかりの梅の盛りにうかれ出でて巢こもる蛙小田に鳴く也 国常
右勝
- 26 小山田の軒ばの雪のしたぐりにぬれて紐とく梅の初花 常之
左勝
- 27 鶯の声のほひに小山田の垣ねの梅はほころびにけり 同
右
- 28 春されば門田の庵の梅の花匂ひおこせる朝風ぞ吹く 光道
左
- 29 せゝらぎの水に匂ひをとめ来れば山田のいほり梅盛りなり 国常
右勝
- 30 薄月夜つまこぶ猫の声す也田中の里の梅や咲くらん 薫
左勝 鐘
- 31 老いらくの坂こえぬればあかつきの鐘の音だに聞かぬ夜もなし 知方
右
- 32 老いの身の行末かたる枕辺にまたも淋しき鐘の音哉 正俊
左持
- 33 梅かをり柳かすめる春の夜は鐘の音さへ朧なりけり 常之
右
- 34 かへり見る外山のかたは暮れそめて尾上にひびく入相のかね 繁材
左
- 35 夢の間のやすらげき世をいかにしてつれなくさそふ暁の鐘 国常
右勝
- 36 鳩の啼く片山守の鐘の音は雲に埋るゝ夕ぐれ空 重かた
左勝
- 37 初瀬山嵐の奥の鐘の音に雲もわかれて夜は明けにけり 長行
右
- 38 幾たびか旅のやどりの夢さめて待つ間久しき暁の鐘 豊政
左勝
- 39 鐘の音は雲に残りてあし引の山の杉むらまづ暮れにけり 薫
右
- 40 色音さへかすみの底にほふ也花鳥守の暁のかね 重好
左
- 41 ゆふま暮横川の檜原吹きわたる嵐の末に鐘ひびくなり 兼利
右勝
- 42 吹きわたる松の嵐もたへへて夜深くさゆる鐘の音かな 宗武
左勝
- 43 とふ人もなき山住みは明け暮れの鐘のひびきお友とこそすれ 正俊
知方

- 44 逢坂やいつゝの鐘の音す也都に遠き夕ぐれのと 長行
右
- 45 峯高み雲に埋るゝ古寺も浮世にかよふ鐘の音哉 兼利
右
- 46 鳥すらもねぐらへいそぐ夕暮の嵐にすさむ鐘の音かな 光道
左勝
- 47 夕日影高ねに落ちて松風のさそふも遠き山寺のかね 宗武
右
- 48 つげわたる野寺の鐘のおとづれに古里遠く思ひける哉 豊正
左
- 49 あかつきの鐘のひゞきに遠方の市人さわぐ声聞こゆ也 国常
右勝
- 50 思ひかねながむる空に果てもなく淋しさ送る入相のかね 常之
左
- 51 何しかも心の底にひゞく哉浮世の中の入相のかね 光道
右勝
- 52 鐘の音はまばらに遠く聞こゆ也夜半の嵐や吹き迷ふらん 繁材
左持
- 53 夕まぐれ物なつかしく降る雨に音もしめらぬ入相の鐘 鎮喜
右
- 54 雨そゝく軒の村竹風過ぎて枕に残るかねの音かな 長行
左
- 55 月花の夢もくだけで手枕の寝覚つれなき暁の鐘 常之
右勝
- 56 花のあした月の夕べの音聞けば鐘にも心有りげ也けり 薫
左勝
- 57 峰遠く横ぎる雲の紅に猶さへ渡る鐘の音かな 鎮喜
右
- 58 つげ渡るかねの響きにうば玉の夢路もしらむ朝朗哉 繁材
左持
- 59 照るにつれ曇るにつれて天地の心も動く鐘の音かな 薫
右
- 60 赤星の光うするゝ大空にとどろき渡る三井寺の鐘 鎮喜
左勝
- 61 有明の月の行ゑにひゞく也山本寺の暁のかね 美堅
右
- 62 玉椿散るとせし間の谷の戸にやゝしらみ行く鐘の音哉 重かた
抜
- 63 軒つゞき梅の匂ひにうち霞み明けぼの白し小山田のさと 正俊
- 64 有明の月の行ゑにひゞく也遠山寺の暁のかね 美堅
- 65 つみ残す鈴菜茎たつ春風に梅が香なびく小山田の里 常之
- 66 山田守る庵のみぎりの真柴垣ほに出て匂ふ梅も有りけり 長行
- 67 鐘の音はまばらに遠く聞こゆ也夜半の嵐や吹き迷ふらん 繁材
- 68 夕日影高ねに落ちて松風のさそふも遠き入相のかね 宗武
- 69 かきつ田のひつぢの枯葉吹く風に匂ひ溢れて梅咲きにけり 鎮喜
- 70 かきつ田の雪解の水もうちけぶり梅が香深き春の色哉 繁材
- 71 稲茎の氷ると見しは我が門にほころぶ梅のかげにや有るらん 鎮喜
- 72 あぜづたひ霞を分けてたちよれば伏家の軒は梅盛り也 繁材

73 あぜつゞき山本かけてさく梅の花かあらぬか雪の明けぼの 薫

74 梅がゝの月に霞める春の夜は鐘の音さへ臚也けり 常之

75 はつせ山嵐のおくの鐘の音に雲もわかれて夜は明けにけり 長行

76 思ひかねながむる空の夕月も散るばかりなる入相のかね 常之

77 小山田の軒ばの雪のしたぐりに濡れて紐とく梅も有りけり 同

78 老いの坂こえそめしより山寺の鐘をかぞへぬ暁もなし 知方

79 かへり見る麓の松は暮れ初めて尾上に残る入相の鐘 繁材

80 峯高み雲に埋るゝ古里の浮世にかよふ鐘の音かな 兼利

81 夕間ぐれ物なつかしき降る雨に打ちもしめりぬいり相のかね 鎮喜

82 朝風に烟るや煙結ぼゝれ梅がゝ寒し小山田のさと 長行

83 鶯のこえのほひに小山田のかきほの梅はほころびにけり 常之

84 花のあした月の夕べの音聞けば鐘もこゝろの有る世也けり 薫

85 頭 峰遠く横ぎる雲の紅にゆふぐれにほふ鐘の音かな 鎮喜

16 九月末つかた 喜蔭選

九月末つかた 喜蔭選

左持 蟋蟀

1 物おもふ霜夜の窓に月更けて身にしむ 斗(ほか)り鳴くきりぐす 長行

右

2 小笹原嵐に消ゆる朝霜に一声高ききりぐすかな 美堅

左勝

3 秋を寒み霜のふるはの浅茅生のかれぐに鳴くきりぐすかな 兼利

右

4 こほろぎの啼く声しげき我が宿はうたて秋とも思わざりけり

左

5 きりぐす鳴く音さびしき夕暮に小野ゝ笹原小雨ふるなり 長行

右勝

6 秋を寒みときめく声も寝屋近く心にしむるきりぐすかな 兼利

7 こほろぎの声にしばしの宵の間はしばし秋とも思わざりけり

左 菊

8 草も木もうつろひかはる露霜の秋をときはに匂ふ菊哉 兼利

右勝

9 おく露にうつしてや見ん白菊の盛り久しき花の色香を 千世蔭

左

10 朝戸出の垣ねに咲ける菊の花手折らば袖に露時雨れなん 長行

右勝

11 誰がそめて菊のきせわたさまぐに紐ときそむる花の色ぞも 兼利

左勝

12 珍らしき庭の白菊咲きいでぬ秋はさびしと誰かいひけむ 美かた

右

13 真さかりは千とせもあかぬ白ぎくの誰か大津の池に植ゑけん 千代蔭

左

- 14 きふけふ垣内に咲ける白菊の匂ひも深き露の色かな 長行
右勝
- 15 露ながら折りやかざゝん八重菊もけふを盛りと打ち薫る也 千代蔭
左
- 16 霜結ぶ籬の菊の花の色をやつしも果てぬ庭の竹垣 長行
左勝 初雪
- 17 きえあへぬ霜の花かと見る斗り真砂にまじるけさの雪哉 兼利
右
- 18 みよしのゝ吉野の山の松が根に花かともるけさの雪かな 千代蔭
左
- 19 朝風に峰の白雲かつ散りて初雪ふれり岡の松ばら 長行
右勝
- 20 朝なゝ庭の小ざゝに風さえてつもりもあへず初雪ぞ降る 千代蔭
左勝
- 21 朝ぼらけ雲の上なる大神の嵐の末に初雪ぞふる 長行
右
- 22 さえし夜のほどもしられてめづらしく今朝は雪よりしらむ窓哉 兼利
左勝
- 23 彼の山の雲に嵐の音はして晴れ行く後に見ゆる初雪 美堅
右
- 24 降りそむる庭の千草を詠むれば霜かともがふけさの雪哉 千代蔭
同
- 25 明けがたの枕に寒く風立ちてけさ珍らしくつもる雪かな 同
抜十首

- 26 めづらしく庭の白菊咲きにけり秋を淋しと誰かいひけむ 美かた
かの山の雲に嵐の色見えて松の一むら初雪ぞふる 同
- 27 消えあへぬ霜の花かと見る斗真砂にまじるけさの雪哉 兼利
28 露ながら折りやかざゝむ菊の花けふを盛りとうち薫る也 千代蔭
29 きりくすなくね淋しき夕暮に小野ゝ笹原小雨ふる也 長行
30 たがそめて菊のきせ綿さまぐに紐ときそむる花を見すらん 兼利
31 物おもふ霜夜の窓に月更けて身にしむ斗り鳴くきりくす 長行
32 朝ぼらけ庭の小ざゝに風さえてつもりもあへず初雪ぞ降る 千代蔭
33 朝朗雲の上なる大神の嵐の末に初ゆきぞふる 長行
34 逸 あらし吹くをざゝが末の朝霜に一声高ききりくすかな 美堅
35
- 【翻刻付記】
埋火・寄山恋
4歌 初句「もみぢの」―「もみぢ葉の」の誤りか。
54歌 作者表記「名しれず」―14歌には「信久」とある。
題 立春・社頭松
17歌 四句「空もとゝなふ」―「空もとゝのふ」の誤りか。
35歌 四句「みどりまゝゆき」―「みどりまばゆき」の誤りか。
43歌 四句「枝にちなびく」―「枝うちなびく」の誤りか。
46歌 五句「春はきけり」―「春はきにけり」の誤りか。
雪中若菜・船上山
10歌 二句「袖打ちか^(えカ)す」―「袖打ちかへす」か。

山家鶯・春恋

12 歌 四句「花におもるゝ」―「花にうもるゝ」の誤りか。

26 歌 三句「なかりせぬ」―「なかりせば」の誤りか。

37 歌 四句「なびくはぎもを」―「なびくわぎもを」の誤りか。

51 歌 四句「露のみれに」―「露のみだれに」の誤りか。

作者表記「名しらず」―70 歌の作者表記によれば「鎮よし」。

田家梅・鐘

1 歌 「左」とあるのは、題に「左 田家梅」とあるのと重複する。

20 歌 二句「雪解の名も」―「雪解の水も」の誤りか。

九月末つかた 喜蔭選

6・7 歌 「右勝」として二首連続しており、不審。

24・25 歌 「右」として二首連続しており、不審。

原稿受理 令和二年一月十日